古田全齋書藥閣集　全

特258
41

始

特258
41

金斎墨叢

全齋墨叢

一筆致啓上候。暖氣相成候處、彌御安全被成御坐、珍重事奉存候。其御地出立之節ハ路次迄御出被下、殊ニ何より之品子供迄へ御投惠被下、御厚情之御事、辱仕合ニ存候。着早速右御挨拶可得貴意之處、彼是繁多ニ取紛、御無音のみ申上候段、御免可被下候。

屯へ之一封、今川へ之一封相達申候。

一神邊驛閭塾之事、入御聽候。御地在勤中も何か繁劇ニて度々も御尋難し殘念存候。

○韓子翼黿ノコト御問暇ノ說ハ御覽被下、無御遠慮御直可被下候。反故ニ相成候而宜御坐候。偏奉賴候。一體活字ニいたし候ハ火事ヲ恐候而ノ事ニ而考訂鍼ニとゞき不申候。翼黿中蒲阪氏ト申候ハ保坂內藏之丞ト申、松平左京大夫樣御家來候處、活板いたし候時分ハ一向不存、其後僕宅へフト出來ニ而逢申候。今ハ水道町ニ而松澤金三郎ト申御家人ニ被成候。折々出會申候。此人抗直ノ人ニ而遠慮なく翼黿ヲ塗抹シ被申候。甚辱存候。何卒先生ニも無御遠慮御是正被下度奉賴候。久太郎子江も乍憚被仰賴被下度奉賴候。前ニも申候通翼黿是ニ而宜上出來ト安心シテ居ルには無之候間、闔棺まて

閭屯は鹽田氏、全齋の姪なり。

閭塾とは卽ち廉塾のことなり。

韓韓非子翼黿の印刷成りしは文化五年なり。

蒲阪氏、青莊と號す、韓非子纂圖の著あり。

は改候心得ニ御坐候。無御遠慮眞黑ニ被成可被下候。

○一體僕存寄ハ先なるへき丈は廣クあつめて、其後ニ煩ヲ去候積なれとも、よき證據ハ多ク出レハイツレヲ除クへキト愛クナリ、夫ニツレテ自ラ猥雜ニなり鄙俗ニなり申候。必竟アマリ解セルやうニと存スレハ浮屠氏ノ樣ニ成候。是ハいやニ候へともあまり疎ナルハ注ノ詮もなく候間、李善文選注、何楷世本古義ナトノ體ニ而又風ノカハリタルものニいたし度、何分無御遠慮不文ノ所を御直被下度偏ニ奉賴候。

○先達而韓子解老篇ニ隔句用韵ニ而進退韻ノ事御尋申候。其後心頭候へハ詩經ニもいくらも御坐候。老子ニも淮南子ニも素問ニも御坐候。何分ニも無御遠慮御直被下度奉賴候。恐惶謹言。

三月十日

太田八郎

經（花押）

菅太中樣

尙々家内之者子供迄、御傳聲被成下辱存候。尙又宜申上候樣申出候。三平よりハ御餞別之御禮宜申上候樣申出候。已上。」

御手紙拜誦仕候。如仰、少々寒相催候。兎角ふりかね申候。彌御安祥被成御坐奉恭喜

關三平は翼亀の跋に男三平刷とあり、文政二年二月歿す。

關鳳山在番終りて歸東の際、菅茶山に寄せたる書翰。

候。私四日に發足に御坐候。何分何か猝にたひ立のやうにいそかしく得あがり申間敷候。御手作のかふら五御惠被下辱仕合に御坐候。早速申付拜味可仕候。乍末御内君樣へも宜被仰上被下候樣奉願候。以上。

十一月朔日めてたく存候。

一厨より御惠辱存候。關東へのみやけには別而辱存候。扨冠山樣の御賴の分を何分相願候。以上。

太田八郎

茶山夫子」

一筆致啓上候。寒威甚相成候處、御揃彌安泰被成珍重存候。然者先達而冠山老公令愛哀傷之御作取失候事申上候。其後別物をさかし候とて見付出申候處、猶又不相濟事、大忘申上候樣も無之事、其譯は冠山老公よりの御書を可御屆申處、夫ト一包ニいたし置、同樣に忘申候。先生へ申上樣なきのみならず、また冠山老公へ何とも申上樣無之恐入候。夫に元稿の□の事もいつれへかなくし、重々申上なく御海涵可成下候。誠に近頃者別而老耄如此の事度々に及ひ申候。まつは右之次第可申上如此御座候。恐惶謹言。

冠冠山は松平定常鑑殿頭と稱す、因幡國の支封なり、御賴云々は玉鬘童女の弔詩のことなるべし。

十一月十七日　　太田全齋

菅太中様

執事

尚々江戸表何のかはることもなく候。但もはや例の名物はしまり、一昨十五日曉丸山田町車門の近邊より出火、本妙寺近邊まで燒申候。しかし御屋敷は御別條なく候。時季折角御自愛可被成候。以上。」

御慶目出度存候。先以彌御安泰被成、御超歳珍重御義存候。僕無事罷在候間乍憚御放意可被下候。右年始御祝詞可申上、如此御坐候。恐惶謹言。

正月六日　　太田八郎　經（花押）

菅太中様」

尚々乍末、御内方様へもよろしく被仰上被下候樣奉願候。三平宜申上候樣申候樣申出候。以上。

甚寒御坐候處、彌御安祥被成御坐、珍重御義存候。此間者思召寄何よりの品とも御取揃御惠被下、御厚情辱存候。且又不快御尋被成下辱存候。寒さ烈し早速相用、今程者平生體罷成候。御放念可被下候。いかゝ敷候へとも大阪酒二升菓子一箱雉一致進上之候。貴報御用捨可被下候。以上。

十二月十五日　　太田八郎

菅太中様」

一筆啓上仕候。甚暑御坐候處、彌御安泰被成御坐候段、承知仕大慶仕候。然者府志中山大夫へ被仰付候者御手傳に而御多事に御坐候由、御尤至極御義存候。右に付下問之御儀承知仕候。萬一にも心付候義御坐候ハヽ可申上候。御引用相成候書目被遣被下奉受取候。外へ承り合可申存候。誠去年中は御存之通繁多にてゆる〳〵御物語も不承、殘念千萬存候。御參府後方今又去年御覽相成候通、二日詰隔番誠暇日無御坐相勤候事に御坐候。今川氏とは毎度御うわさ申上候。辭安は表勤故家内病人にても無御坐候へは、甚希に出會仕候。此繁多には罷レ候事に御坐候。尚追々可申述候。恐惶謹言。

六月廿六日　　太田八郎　經（花押）

菅太中様

（府志は福山志料なり、文化元年命を受けて編輯に從事し、六年二月成りて上る、三十五卷附錄五卷あり。中山は弁助光昭にして、福山藩の大目附なり。辭安は伊澤蘭軒なり）

尙々甚暑折角御厭可被成候。書目辭安へも爲見候樣被仰聞承知仕候。先達而御噂相成候。三條御書拔被下辱仕合存候。扨有合に付筆一筐五管□とうし五葉進上之候。御笑受被成下候ハヽ、辱存候。」

一筆啓上仕候。秋暑御坐候處、彌御安泰被成御坐珍々事奉存候。私方いつれも無事御坐候、御放念可被下候。扨先頃之備中吹屋村銅山之礦一箱卽奉指上候。其節の御狀上置候處、御いそがしくて此節御下故、僕か例のわすれ、たしか此御返事も不申上と存候間、乍延引申上候。其節丹後國神代杉ノコト被仰下、まつ御用も無之候間、御沙汰も無之候。

一先頃の府志被指上、御沙汰を蒙らせられ奉恐悅候。別而先生にもありかたう被思召候御事と奉賀候繁多にとりまきれ御無沙汰はかり申譯も無次第、御免可被下候。扨僕事いとゝあしきおほえか、近頃はわきてあしく相成候。先頃冠山君へ上候節、北山愚公披裘公ノ公字ノコトを御物語の折しも何かわすれの事ありたる時、其方は忘公なりとて御笑相成候。かねて御斷御油斷はならぬ事に御坐候。恐惶謹言。

八月廿六日

太田八郎

經（花押）

墨文化六年茶山六十二歲、福山志料成る、屑衣を著くるを聽さる。

菅太中樣

尙々乍末、御內君樣へも宜御傳へ被下度奉祈候。北條氏へも宜御致聲被成下度奉願候。」

一筆啓上仕候。暖和相成候。然者御道中御安全、此節ハ御着可相成、珍重事ニ存候。誠ニ御在勤中ハ繁多にとりまきれ、每度御疎濶にのみ打過不本意千萬奉存候。御在勤なかき間の御事、御苦勞千萬、御着後起居伺度如此御座候。

一府志校合、昌太郎掛居候が、扨而とかく將明不申候。また此節ハ、御神忌御日限せまり別而御繁雜之御事共に御座候」今日林祭酒より御送り物御賴被遣候ニ付、卽御千別とも上申候。

菲儀　三種

右之通壹箱也

尙追而可申上候。恐惶謹言。

三月廿三日

菅太中樣

太田八郎

經（花押）

墨北條霞亭の廉塾に在りしは文化十年より文政四年までの間なり。

墨昌太郎は全齋の長子名は周、字は孟昌、文化八年より十二年頃まで廉塾に居りしこと茶山集に見ゆ。

墨祭酒は逸齋衡なり。

墨文化十二年二月廿六日發都歸鄉せしこと讀嘉日記に見ゆ。

尙々乍末御家内樣ニ宜御仰上被下度奉存候。此書狀者今日林家より之御送物あとより認候故別の事不申上候。以上。」

爾來者御疎闊打過申候。彌御安寧珍重之御事に存候。然者菅茶山歸鄉、今暫間も候と樣にのみ存居候內發都、其節此微物贈り可申と存候て、間に合不申、何とぞ幸便之節、貴君よりよろしく御申達御屆被下度たのみ入申候。御□□ながら吳々も可然御取計可被下候。不具。

三月廿三　　大學頭

八郎樣」

御慶目出度存候。先以彌御安泰被成御超歲珍々御儀存候。僕義無事致加年候間御放念可被下候。右年始御祝詞申上度如此御座候。恐惶謹言。

正月五日　　太田全齋

菅太中樣

尙々舊年四日之御狀相達申候。先達而も差上候畫帖、卽奉差上候。裝潢之事ハ御好も被爲在候御事故に被仰付候御紙面をそのように申上候。宜申遣候との御事御座候。舊年右之義申上候か相達候哉。

一村々御禮の事、被仰下候かの秦昭襄王の事おもひいたし申候。里正とも費罰を被り候哉否。

一江戶舊年雪ふり不申候。當春もふり不申候。

一舊年麴町邊餘程の大火。

一小川町舊御屋敷御拜領、一同大よろこひ。

一當年今日まて御屋敷近邊火事沙汰無之。

尙追々可申述候也。」

一筆啓上仕候。迎梅候、彌御安祥被成御坐珍々義奉存候。僕方無異罷在候間乍憚御放念可被下候。每度御尋被下辱存候。是よりは御無音のみ申上不本意之御事存候。御飛脚御便之度々書狀數通書疲れ候而、官事之外は大抵延候故ッイ〳〵大御無音に相成候」扱姬路執政河合隼之助子息を先生之御敎諭を願度候間、僕より宜相願候樣囑託に御坐候。且又御承引も被成下候はゝ外に兩三人計も同藩人同樣願度、尤歸鄉後隼之助より也尙又相願可申との事に御坐候。御承知被下候ハゝ、於僕辱次第に存候。右之趣申上度如此御坐候。恐惶謹言。

四月廿日　　太田八郎

關逸齋の書狀を玆に附載す。

關安政武鑑に河合隼之助、家老とあり。

嘉文政元年茶山七十一歳醫療の爲大和に行きし時のことなり、三月六日出發東上し、五月廿九日歸郷せり。

菅太中様」

五月十四日、京都ニ而御書捨之一通相達拜誦。先以御安泰被成御坐、珍々事存候。扨先頃御上京、其後御不快之趣、併段々御快方、今程は御全快御歸郷と存候。扨其頃者堂上方御拜面被成候よし、兼而御高名故之儀と存候。併何かと御心配之御事と存候。一先頃姫路河合隼之助、其子息を先生御門人にいたし度候間申上呉候樣、賴に御坐候而申上候處、御上京之由、無程同人瓜時、彼地より御掛合も可申哉、何分御承引被下度奉願候。尤いまた爰許在留中故、面話御上京之事共可申候。

一昌太郎事、先達而長崎御奉行間宮諸右衛門樣江罷出御供可仕、右御願指出、願之通被仰付候處、其後故障有之相止メ申候。さも無之候ハヽ、御地通行拜顔も可致處、殘念存候。其後昌太郎風邪今以聢と不致こまり申候。夫故此度書狀上不申僕より宜申上候樣申出候」扨又忰又太郎も久々不相勝信助事也扨々面白なき事にてこまり申候。又後便可申上候。恐惶謹言。

六月廿四日　　太田八郎（花押）

菅太中樣

嘉信助は又太郎武群と改名、仕へて學問所掛となり、文政四年十月五日歿す。

嘉昌太郎は韓非子翼毛の跋に男周と見えたる人、由緒書に病氣の爲に出仕せずとあり。

尙々名村進八御狀持參まゐりをりふし不快、又太郎出會其後は逢不申候。進八曩時御前に而一面、僕よりは覺え申候」智積院大わらひ」此節江戸二分判の沙汰はかり去ル十日より通用□□被仰出、僕只一度見申候。家內之者共はいまた見不申と申位の頃合に御坐候。御地なとへはいつ頃の着に可有御坐候哉。乍末御家內樣、北條氏へも宜被仰被下度奉賴候」

一筆致啓上候。深冷彌增候得共、彌御安全被成御入、珍重御事に存候。然者忰又太郎儀久々病氣之處、養生不相叶去ル五日寅ノ上刻病死いたし申候。此段爲御知旁可得貴意、如是御坐候。恐々謹言。

十月廿一日　　太田八郎　經方（花押）

菅太中樣」

曩時大分德村傳言被仰下、承知仕候。私も一面いたし申候。如仰いろ〳〵の人物いたり申候。近頃最上德內是もハゼの御用にて、其御料中をも通行候よし、亦爲神農之言者、傷寒論ノ說もあるよし最上屋敷は丸山はとなり僕屋敷の下なり　二神農その名俱に德字なるもをかし。

芳蕣露―秋―霜―

嘉文政四年十月なり。

嘉德內、名は常矩、字は士規、鶯谷と號す、出羽楯岡の人、探險家なり、天保七年九月五日歿す、年八十三、蝦夷草紙、論語彝訓、孝經古今文異同考、度量衡說統等の著あり。

はなに〻御據相成候哉。其節御尋はなく候へとも、御敎示被下度奉願候」江戸者只今めつらしきことともなく、御靜謐とか申ものに御坐候。尙春可申上候。恐惶謹言。

十二月朔日　　太田八郎（花押）

菅太中樣

尙々時氣折角御自愛相成候樣奉默禱候。乍末御內君樣へも宜被仰上被下度。北條氏へも宜奉願候」三平事も先頃者月に四日か非番に御坐候處、近頃は日勤になり、御無音のみ申候と每度御噂申居候。以上。」

一筆致啓上候。殘暑强御座候處、彌御安泰被成御座奉珍重候。僕相替りも無之候間御放念可被下候。先頃者北條讓四郎結搆被仰付目出度存候。さそ御悅之事と被存候。在番中無恙勤仕候事御座候間、是亦御掛念被成間敷候」先達而被差上候古瓦相達卽奉差上候。宜申候樣御沙汰御座候。尙後便可申述候。恐惶謹言。

七月廿八日　　太田八郎　經（花押）

菅太中樣

尙々當年は江戸より下奥州までひてり、今日までふり不申候。少々は先頃より雨もあり候へとも、誠に引たり不申、何分殘暑別而强御座候。御地は豐熟之よし奉恐悅候。乍末御家內樣へも宜奉賴候。以上。」

北條讓四郎の福山藩に召出されしは文政二年四月十七日なり。

過刻者、御手翰致拜見候。先以早春御出被下辱存候。世中百首御貸被下辱存候。また山井の假字の事、御挨拶愧入候。扨また暮と春との御詠奉感候。但第二の御詠にて、

說文𠂤女陰也象形卽也字

のことおもひいたし

鶯の聲なりの字を見とかめて
我もおほえすうちゑみにけり　　盧胡頓首

正月五日　　八郎

讓四郎樣」

世中百首は荒木田守武の著、享保七年の出版なり。

此問者、海士人の事被仰下序御坐候而、小林樣へ承り相遣候處、左之通、

夫木廿三　海　　顯昭

いそなつむなこの海士人ことゝはむ
ほすにかわかぬ袖はありやと

同二十五　浦　　よみ人しらす

後漢書應劭傳に、宋愚夫寶燕石、緘櫝十重、觀之者掩口盧胡而笑とあり。

羅北條讓四郎、名は讓、字は子讓、假亭と號す、志摩の人、廉塾に在ること數年、福山藩の文學となり、文政六年八月十七日江戸邸にて歿す、年四十四、巢鴨眞性寺に葬る。

羅小林は歌城なり、名は元雄、字は子駿、文久二年二月八日歿す、年八十五。

羅夫木和歌抄は三十六卷、鎌倉時代に藤原長清の撰集したるものなり。

春たては霞の浦のあまひとは
　さくらかひをや先ひろふらむ

如此候。一寸申上候。以上。

十月十九日　　太田方頓首

霞亭賢契」

彌御安全奉珍重候。然者少々懸御目度候間、明日御出被下度奉願候。以上。

六月廿五日　　太田全齋

猶々今日ハわろく候間、明日御出可被下候。

伊澤辭安樣」

以手紙啓上仕候。雪故春寒相增申候、倍御勇健被成御坐珍重御義存候。此兩種（鮭小鯛）奉呈下執事御笑受被下候ハヽ辱存候。誠に此節は御出被成下、乍毎度匆々御事失敬之至存候。尙其内拜眉萬々可申上候。以上。

閏正月廿六日　　太田八郎

内角右衛門樣」

閑蘚安は福山藩の儒醫、蘭軒と號す、文政十二年三月十七日歿す、年五十三。

閑内藤角右衛門は福山藩の家老。

一筆啓上仕候。次第に寒威相增候處、被成御揃倍御勇健被成御座、珍重御儀存候。陳者先達而ハ御狀被成下辱拜見仕候。毎々是よりハ御無音のみ申上恐入存候。先以殿樣御不例段々御快御言語も大方よろしく被爲成候、御同意恐悅難有存候」扨また角助殿在勤之義、御免無異歸京被致候段珍重存候。乍然家内衆留守中之不快、今程ハいかゝ哉と申くらし、扨々心事致推察候事ニ御座候。且又先便御細書、御地之事共御内々被仰付、爰許中山氏とも申合、段々御痛心之趣とも奉察候。乍然是も今程者穩に相成候而御安心の御義と存候。いつれ世の中は一ッすめば一ッ別の事出來るか常のならひにて、是にて後は根切り葉切り是ぎりなりと申事にはまゐりかたく、生涯油斷はならぬものと見え申候。あまり御無音ゆゑに御起居相伺度如此御座候。恐惶謹言。

九月十七日　　太田全齋

經（花押）

佐作右衛門樣

參人々御中

尙々時氣折角御自愛被成候樣奉默禱候。乍末となた樣にも宜被仰上被下候樣奉願候。

以上。」

閑佐原氏は福山藩の城代なり。

拜見仕候。然は御嘶被成度御儀御坐候而罷上候樣被仰下奉畏候。追而罷上可申候。

十月晦日　　太田八郎

作右衞門樣」

一筆啓上仕候。次第向暑罷成候。倍御勇健被成御坐珍重御義存候。然者先月者媳義養女に仕度段、願之通被仰付、且又武田團平弟藤七郎養子に仕度、以先月廿九日奉願候處、卽日願之通被仰付、難有仕合存候。當日引取婚姻相整申候。右御禮且御吹聽旁申上度、如此御坐候。恐惶謹言。

三月廿七日　　太田八郎　經（花押）

佐作右衞門樣

參人々御中

尙以時氣折角御厭御自愛相成候樣奉默禱候。以上。」

一筆進上仕候。倍御勇健被成御坐珍重御義奉存候。然者此度悴藤七郎御目見被仰付、卽日結構被仰付、難有仕合存候。右御禮御吹聽旁可申上、如是御坐候。恐惶謹言。

四月廿六日　　太田八郎

■福山に在番中、佐原佐右衞門に答へたる書狀。

■養女名はとみ、乙幡儀大夫の女なり。

■藤七郎は文政六年相續し、嘉永六年十二月十二日歿す、安政武鑑には年寄とあり。

佐作右衞門樣

參人々御中　　經（花押）

尙々時氣折角御凌御自愛相成候樣奉默禱候。必々□□固ク御斷申上候。以上。」

御手紙拜見仕候。如仰冷氣相成候。彌御安泰被成御坐珍重御儀存候。然者今晩罷上候樣被仰下候處、今晩は與三右衞門殿へ罷出候御約束申上候。又明十九日者太仲殿、廿日者讃申聞に而織馬宅へ罷越候。廿一日廿二日者先約御坐候而日限未定に御坐候間、是亦ふさかり申候。廿三日は伊右衞門殿御約束、廿四日は弘道館と日々つまり居申候。其後は又廻村いたし候間、兩三日は休息いたし不申候而は聲嘶嗄仕候付、當分之內は先々隙日無御坐候。折角被仰下候へとも、右之仕合御坐候者御斷申上候。以上。

九月十八日　　太田八郎

內延三郎樣

貴報」

其後者御無音打過候。彌御安祥被成御座珍々存候。僕相替事も無御座候間、御放念可被下候。江戸表何之相替事も無之、壽安無異御座候。其外知交替事も無之候。唯平井

■此手紙は福山に在番中、內藤延三郎に招請せられしを辭退せし返信なり、在番中は忠孝の道を說いて各村を順廻せしこと其著立教評義に見えたり。

■太中は菅氏、織馬は安藤氏、伊右衞門は岡田氏なり。

■弘道館は福山の藩校なり。

鈴木岩次郎は白藤なり。

克藏物故、卽太中へも悴より書狀遣候」先頃大島忠藏方へ（賀州儒員）鈴木岩次郎樣御書物番松平帶刀（龜山侯大夫）立原・塙・椒齋集會の節、亭主云、近頃藍井にて物を染ることもあり。藍井珍らしと申出候時、帶刀云、近頃在所この事あり、城州葛野郡樫木原村といふ所にて、旅僧田の溝へ手拭を落したり、其手拭染候ニ付、其土人に敎へて物を染さするによく染る故、後はふしにて下地をして染れば、るりこんに染る、其後ひたと其溝の水にて染ることになりたり。名をくりといふとなり、そのくりはいかやうの物なりやと尋候へハ、江戸表のどぶの内にあるおはくろのやうなる赤色のきらなりとなり。歸宅後其夜下僕共に若しることもやと尋候へハ、信濃なるまゝたき男曰、國にて染物を紺屋へあつらへ來り候に、其紺屋外より水をとり候ニ付、誰人か心付其水原をしり得て、其水にて染候によく染候故、其後は紺屋へあつらへす、其水は江戸のおはくろのやうなるもあり、またさひもなくいたりて清きもあるよし申之候。卽涅而不緇の涅なるへし。（漢隸字原、延尉仲君碑、泥而不滓、費鳳碑、泥而不滓、泥乃結反、音涅。）泥肥一種物を染へきものあると見えたり。因ておもふに其御許御城の御堀の水の赤色のきら此ものと同種なるへし。□□なとへ御談試たき事なり。また茶山へも御咄可被下候。併出來るや出來さるやおほつかなく候間、あまりあらはになく内々御試被下度候。出來候へハ費を省の一に候。餘ハ後便可申述候、恐惶謹言。

九月廿一日

太田八郎

經（花押）

鈴木主輔樣

鈴木圭輔は福山藩の文學なり、天保七年九月二十七日歿す。

尙々時氣折角御保重可被成候。以上。」

以手紙致啓上候。暖和相成候處、彌御安泰被成御坐、珍重御儀奉存候。私共先達而爰許へ引移之節は被掛御心、何より之品御惠投被下、不淺厚仕合奉存候。今日麤末之重之内申付候間、乍輕微入御覽候。乍末といた樣へも宜被仰上被下候樣奉賴候。家内之者共宜申上候。以上。

全齋

源右衞門樣

源右衞門は天氏にして福山藩の年寄、其實姪とみは全齋の養女にて、藤七郎の妻なり。

甚暑之節御座候處、倍御勇健被成御座、珍重御義奉存候。然者先達は北條時代諺留一冊拜借永々難有仕合奉存候。今日右御禮返上旁參上仕候處、御異守に御座候間申上置候。以上。

七月二日

太田全齋

關是は近藤氏を訪問せしに不在なりしかば要件を記し置手紙としたるもの。俚諺集覽引書目錄に北條時代諺留を載せ、近藤重藏より借りたることを附記せり

亦俚詩集覽を全齋の著とするの一證とするに足らん。
案近藤重藏、名は守重、正齋と號す、天保十二年六月十六日歿す、年五十九。

近藤重藏樣」

予太田全齋翁の傳を詳にせんと欲し、遺著遺墨を蒐集すること年あり。しかも寓目せしもの少なく、其書翰は睹る所僅々二十餘通のみ。右に錄するもの卽ち是なり。今之を排次せんとするに年代不明のもの多く、寔に遺憾に堪へざるなり。博雅の士幸に高敎を吝まるゝことなかれ。濱野知三郎識す。

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行

太田全齋書簡集
定價金四拾錢

編纂者　濱野知三郎　東京市王子區下十條町六八七番地
發行者　森田市藏　東京市京橋區湊町三丁目八番地
印刷者　高橋赤次郎　東京市京橋區湊町三丁目八番地
印刷所　高橋印刷所
著作權所有
發行所　東京市京橋區西八丁堀三丁目　文祥堂書店　電話京橋一八五一番　振替東京三八二七番

三村清三郎先生註解

新最刊

馬琴翁書簡集

菊判洋裝帙
全壹冊
紙數四百四拾餘頁
定價金二圓三拾錢
送料金廿二錢

三村清三郎先生曰——若し馬琴自ら馬琴を描いてゐるものを求むるとしたら、これに越すものは無い。骨を折つてかいた創作よりも、不用意に作つた手紙の方が、どれ程作者の面目を出してゐるでせう。何といつても一代の文豪の彩筆です。筆の趣く所、自己と周圍と、時代と世間とを活躍させてゐる。それに今から解し難いことは、一々頭註を加へ、馬琴を知る爲めに、末に委しい系圖も添え、檢出し易いやうに目錄と索引も附しました。

【最新刊】

藤貞幹書簡集
菊判和裝全一冊
定價金八十錢
送料金六錢

本居大平書簡集
菊判和裝全一冊
定價金五十錢
送料金四錢

太田全齋書簡集
菊判和裝全一冊
定價金四十錢
送料金四錢

蜀山人書簡集
菊判和裝全一冊
定價金六十錢
送料金四錢

【最新刊】

本居宣長書簡集
菊判和裝全一冊
定價金五十錢
送料金四錢

狩谷掖齋書簡集
菊判和裝全一冊
定價金五十錢
送料金四錢

大鹽平八郎書簡集
菊判和裝全一冊
定價金五十錢
送料金四錢

村田了阿書簡集
菊判和裝全一冊
定價金五十錢
送料金四錢

發行所 東京市京橋區三ノ三堀西八丁目 文祥堂書店 振替東京三八二七 電話京橋一五八一

終